

---

A new adventure and bonds

夕陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A new adventure and bonds

### 【Zコード】

Z8579X

### 【作者名】

夕陽

### 【あらすじ】

あの、藍染たちとの戦いから約50年。

死神にとつては短く。人間にとつては長い時間がたつた。

現世組は皆、戸魂界へ。そして、戸魂界にある、瀬靈廷では一護を死神に引き込もうとする運動が…

一護をはじめとする、石田、井上、茶渡。そして、遊子、夏梨。

たつさに啓吾、水色を取り巻く死神ストーリーが今、始まる！

## 回答会？（前書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しくお願いします。

## 同窓会？

新たな冒険

新たな絆

\*

\*

\*

\*

あの、だれもが震え上がった、藍染との戦いから約50年。

死神にとつては短い時間。人間にとつては長い時間。

そのため、現世組の死神代行 黒崎一護、滅却師の石田雨竜、人間なのだが、一護といふことで才能を開花させた、井上織姫、茶渡泰虎

そして、一護が、藍染と戦つてゐる時、目が覚め靈力があると分かつた、有沢竜貴、浅野啓吾、小島水色。

あと、黒崎家の遊子に夏梨の9人はもちろん死んだ。

ちなみに、もともと死神だった一心は、一番最後に死んだ夏梨に付き添い、<sup>ソウルンサエティ</sup>「<sup>イヌヅリ</sup>」戸魂界に、一緒に行つた。

夏梨を抜いた残りの8人は、「死んだら戸魂界に行く」ということを知つていたので無事に戸魂界にたどり着き、それぞれ流魂街に振り分けられた。

一護、遊子、そして水色は西流魂街1地区「潤林安」。

石田、チャド、井上は南流魂街7・8地区「戌吊」。残りのたつき（

これからは「たつき」と書く)、啓吾、夏梨、一心は北流魂街80地区「<sup>ザラキ</sup>更木」に。

みんなばらばらがある程度固まつてゐる。

南流魂街78地区に送られた、石田達。そして最も治安が悪いとされている北流魂街に振り分けられた、夏梨たち。

振り分けられた所はばらばらであるが、皆それぞれどこのところはわかつていた。

(簡単に言えば、最後に死んだ夏梨とともに「<sup>魂界</sup>」に行き、偶然同じところに振り分けられた一心は、縛道の77 <sup>てんていくうら</sup>天挺空羅でみんなに呼びかけた、ため。)

そこである日みんなは一護のいる西流魂街1地区に集まつた。

\*

\*

\*

「よう。みんなは久しぶり  
「ひさしひりー。黒崎君！」  
「いっちじー……会いたかったよ。」  
「おーす。啓吾ーお前変わつてないな。  
「一護ーうで、うで！息が…。」  
「おーわりーな啓吾」  
「大丈夫ですか？浅野さん。」  
「えつなに？なぜに水色、敬gブギヤつ…！」  
「つるさい。もーだまれ！」  
「わーあ。たつきちゃん。死んじやうよー。」  
「何言つてんの織姫。もつ私たち死んでるのよー。」  
「アーそうだつた。」  
「こち兄ー遊子ー！」

「夏梨ちゃん！お父さん！」

「いや～。ゆず～。あいたかつたぞー。」

「キモイ！もうこれ以上しゃべるな！」

「ナイス！夏梨！」

「ム。」

「あー。君たち久しぶりの再会のところ悪いんだが、少し黙つてくれないか？。」

「…………。」「…………。」「…………。」「…………。」

「わいー。石田。」

「分かればいい。」

「ンじゃ。えーと。……。」

「……まさかと思つが黒崎。何の用もなしに僕たちをここへ招いたのか？」

石田が、ここまで来るの結構大変なんだぞ、とつぶやか、一護に怨むような視線をぶつけた。

「……途中で切るな！そんなわけねーよ。」

「えー。ゴホン。ンじゃみんなにいくつか質問するだ。」

「まず、一つ。みんなはいつごろ死んだ？」

「はいはーい。」

井上が手を挙げた。

「ンじゃ井上」

「ゴホン。私は、35歳の時に病氣で死んじゃったんだ。」「確かにそんぐらいの時、織姫、ガンで倒れたね……。」

「そうか。じゃ次。たつき。」

「えつ。あたし。あたしは交通事故。」

「何歳ぐらい？」

「うーん。3…7、8歳かな？」

「そうか。次は…啓吾」

「おれつ。俺も交通事故つか、有沢が死んだ交通事故と同じなんだ

よ。」

「えつわせーそーいえばあれ3台こつそこに事故つたんだっけ。」  
「ことはあんた…、信号無視したほう?」

たつきは、不敵な笑みを啓吾に向けた。

「へつ…ち、ちがうよーそれもつー台のまつ。」

「ほんとーお?」

「ほんとーほんとほんとですかひー。」

「…。あつやう。」

「ふ。」

(苦労してゐるな。啓吾)

一護は心の中でこつそつと思つた。

「…。じゃ次。水色。」

「ん。僕は、27歳ぐらじに海に行つて、溺死。」

「むーいな

夏梨がつぶやいた。

「ははつ…。じゃ次、石田」

「ン。僕か。僕はな。やつぱやめた。」

「…。おー。やめんなよ。」

一護、啓吾そしてたつきが突つ込んだ。

「いやー。」

「こまかすな。」

「厳しいな黒崎。」

「厳しいな。第一みんな答えてるんだから、お前も答える。」

「…。」

「あつ。もしかしてすんごく恥ずかしい死に方だつたりして。」

夏梨が言つた。

「…。」

石田は顔こは出しえないが、内心めぢやくぢや焦つていた。

(なんでわかつたんだ。)

「図星か。」

「凶星だな。

「うん。図星だね。」「

上から、一護、チャド、井上の順だ。

「 わあ 石田。 うわ うと 答えや。 」

「……。絶対笑うなよ。」

石田がぽつりと言つた。

「そんなに恥ずかしいのか？」

「はあー。僕が死んだのは……。」

「ここにいる石田以外のみんなが、なぜか分からぬいかず」ぐる緊張した

「。漢が36歳」云。三三一もつて、威印師の修業をしてゐ特。

岩の上から誤つて足が滑り高頭部強打。そのまま死亡。

1

近くにいる人は、「爆発が起きたのでは」と思ひほどの大声で石田を抜いた9人は笑っていた。

「はつは死んだー」

「一語を失はざまに口に漏らす。

「狂」ノ二八二

גָּדוֹלָה

「…………」

石田が切れた。

「…………。はい。すいませんでした。」

「ははははー。ふふひー」

「はいそー。いつまで笑ってる。」

石田が軽く切れながら井上に向かつて言つた。

「はひ。  
すみません。」

一分がれはいし。

「…。そういう黒崎は、どうして死んだんだ?」

「俺か。俺はつ、ていうか俺たちは、親父が車を運転してる時に。相手の車が突っ込んできた。交通事故。その事故で死んだのが、俺と遊子。」

「そうか。でも君が死んだらすぐに朽木さんとか阿散井君とか来るんじゃないのか?。」

「もちろん来たぜ。まあ。来たって言つても俺たちが流魂街に振り分けられる場所にな。」

「何故だ。君がきたなら即刻死神にすればいいものを。」

「ああ。ルキアがすぐにでも俺を死神にしようとしてたな。」

「じゃあなんで。」

「俺が断つたんだ。俺が死んだのは、大学生、最後の夏。遊子は大学生の夏だ。もちろんまだ誰も死んでないから知り合いは誰もいない。だからみんなが来るのを待つてたんだよ。なあ。遊子。」

「うん。」

「そりかまあ分かつた。ところでなぜ夏梨ちゃんは何故死んだんだ?見た目はずいぶん若いが。」

「あー。私が死んだのは一兄たちが死んだ10年後。つまりあたしの年は30歳。○・＼?ンで、死因は、ひかれそうになつていた親子を助けて死んだ。」

「ああ。そうか。一つだけ聞いていいかい?。」

「うん。」

夏梨が答えた。

「後悔してないか?。」

「もち!」

夏梨は飛び切りの笑顔で答えた。

「そりかい。」

石田は安心したような声を出した。

「おーい。もう一かい。」

一護が少し大きめの声を出した。

「ああ。もちろん。」

石田は答えた。

「ンじゃ最後にチャード。」

「ム。俺は、……。上から鉄骨が降つてきて死んだ。」

「ン？ 前にもこんな」となかつたか？。

一護が水色に聞いた。

「あーー。うん、あつたね。」

「だよな」

「うん」

「……。ちょっと一人とも何話してるのでねえなに？ なんなのー？」

「なんですか。浅野さん。」

「はつ。水色が敬 <sup>gō</sup>ブギヤ」

「だ・ま・れ」

たつきが、啓吾の腹を踏んだ。

（あははは。さつきもあつたな）の光景。

井上は内心苦笑した。

「は…い」

啓吾はのどから搾りだいたような声を出した。

「ねーインコの兄ちゃん。」

夏梨がチャードに聞いた。

「インコの兄ちゃんじゃない。茶渡泰虎だ。」

「あつやう。まあそれは置いといて。……。さつき自分の死に方のことを話してるとき細かいことハシヨッただる。」

「ム。」

（やつと気づいたか）

チャードは思った。

「ム、じゃなくてーちゃんと答へなよーえーとなんだつけ。やー、」

「違うぞ夏梨！ 茶渡兄じゃなく、チャード兄だー。」

一心がこじだとばかり胸を張つて夏梨に言った。

「だまれ親父。」

夏梨が睨んだ。

「はーい。」

「んじゃ。チャド兄はどうして死んだの?」

夏梨が改めて聞いた。

「ム。俺は、ビル建設現場の道をとつてたら、ベビーカーを押しながら歩いてる婦人の上に鉄骨が降ってきた。それを俺はかばって死んだ」

「ふーん。あたしと同じじやん。」

「でもよーチャドー。お前高校のときは、上から鉄骨が降ってきても生きてたじゃん。」

一護が聞いた。

「打ち所が悪かつたようだ。」

「…。そうか。」

## 同窓会？（後書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しくお願いします。  
誤文字などの指摘がありましたら報告お願いします。  
感想お待ちしています。

死神にならないか？（前書き）

第2話、どうぞ！。

死神にならないか？

私たちの運命は

もつ一度交わる」とができるのだろうか？

\*

\*

\*

\*

尸魂界。

### 十三番隊隊舎。

「その話は本当ですか。浮竹隊長！」

「本当だ。」

ルキアは浮竹の答えを聞き、驚いたような表情をしていた。

「そうですか。私が…。」

「いやなら行かなくていいんだぞ。」

「…。いや。行きます。やはりこのことは私が適任だと思ひますので。」

「ああ。先生もそうおっしゃつていた。でも一人で行くのか？。」

「ええ。そうですね。でもそうしたら誰を誘おうか…。」

「ああ。そうだな。3番隊の阿散井君なんてどうだ。」

「ええ。それは私も考えたのですが。恋次は、何せ隊長の身ですの

で。仕事が忙しいかなーと。」

「ああそうか。じゃあ…。そุดだな田番谷隊長とかは？特に一護君の妹の夏梨ちゃんだけ？。」

「はー。」

「喜びそうじやない。」

「ええ。でも田畠谷隊長はちゅうと今は、手が離せないやつなので。

「…。そつか。じゃあやつぱし一人で行くのか？」

「はい！」

ルキアは気合が入った声で答えた。

「そつか。まあそんなに難しくはないだらう。もう少ししたらあつちから来そうだけどじな。」

「そうですね。」

ルキアは苦笑した。

「それじゃ。行つてきます。」

「おう。」

ルキアは瞬歩で、その場から消えた。

「楽しみかなあ。朽木は。」

浮竹は、ふふっと微笑みながらつぶやいた。

「さあー！今日もじゅうた。」

ばた。

「キヤー！ 浮竹隊長大丈夫ですか？！」

近くで隊長のことを見ていた清音が叫んだ。

（ああ。今日も布団かな。）

浮竹は他人事のように思つていた。

\*

\*

\*

\*

西流魂街1地区

「…。結局みんな寿命で死んだんじゃないんだね。」

遊子が言つた。

「そうだな。まあそつじやなきやみんなこんなに若いわけないしな。

「一護が苦笑しながら言った。

「ところで黒崎。ほかに僕たちに質問はないのかい？」

「…。」

「お兄ちゃん？」

「ン。あーあるぜ。もう行っちゃえばぶつけられ最後の質問だぜ。」

「…………（「ゴク」）…………」

一護以外のみんながつばを飲み込んだ。

「みんな……。死神になる気はないか？」

「えつ。」

声を出したのは…夏梨だ。

「それ本気？一兄。」

「本気だぜ。」

「みんな多少は靈力があるだろ。」

「うん。まあ。」

答えたのはたつきだ。

「だから誘つてんだ。死神にならないかって。」

「…………。」

みんなは黙りこくつた。まあ当然だな。一護はそう思つた。

「それほんと！一兄！！」

ゆういつ夏梨だけが目を輝かせ一護に聞いた。そんな夏梨の態度に驚いたのか、一護は一瞬言葉を失つた。

「ああ。まあな。」

「あたし絶対なるよ一兄！。」

「そ、そうか。」

「みんなは？。」

夏梨は生き生きとしてさつきから黙つているみんなに聞いた。

「私はなつてもいいよ。」

井上だ。ひじを曲げる程度に手を挙げながら言った。

「あたしもなつていいよ！…ていうか、私はバリバリなる気満々だつたけどな。」

たつきが意氣揚揚に答えた。

「はーい俺も俺も。」

「僕も。」

「ム。俺も。」

「わ、私も。」

上から啓吾、水色、チャド、遊子の順だ。

「そうか。」

一護は内心胸をなでおろした。みんなの反応は少し予想外だつたからだ。

「残りは…石田だけだな。」

みんなは石田を見た。石田はうつむいていた。

が、急に顔をあげた。

「はあ。君たちなんだい。人の顔をじろじろ見て。僕の顔に何かついてるのか？」

「ン。いやお前はどうだ…。死神になるかどうか。」

「僕は、滅却師クインシーだ。でもまあいい。いいよ暇だから。死神になつてあげても。」

（めちゃくちゃ上から田線だ）

一護たちは心の中で思つた。

「そうか。じゃみんなで死神になるぞー。」

「何そのやる気のない声は。」

たつきが言つた。

「ねえ黒崎君。死神になるには、死神の学校に行かなくちゃいけないんじゃないの？」

井上が一護に聞いた。

「えつそななの？」

啓吾も、一護に問いかけた。

「ああ。やつだ。」

「えつじやあ、試験とかはあるの。」

「…。じゃあ、それはそこそこいる人に説明してもいいおつか。」

一護は家の裏を指しながら言った。

「くつ。そこに誰かいるの?。」

井上が変な声を上げた。

(馬鹿な。一護に私の靈圧がわかるはずが…。)

「いいから出てきなよ。」

一護が呆れていった。

「出でこなになら迎えに行へよ。ただしあと一〇秒たつたら。」

「一〇。九。」

(じつあらばじへくか?。)

「八。七。六。」

(どうする。)

「五。四。三。」

(あーも考えてもらいちが明かない。)

「二。一。」

シコン。

「ふー。やつと出てきたか。」

今までてきた人物を見てみんなの顔が驚きやら嬉しさやら。

一護は今出てきた人物に話しかけた。

「……。久しぶりだな。…。ルキア。」

死神にならないか？（後書き）

どうでしたか？ついにルキア登場です！

誤文字のじ揃揃、感想お待ちしています。

## 漁靈廷へ（前書き）

ルキア登場しました！ちなみにルキアは1-3番隊副隊長です。

それでは、第3話スタート！

あなたの思い

私の考え方

\*

\*

\*

\*

「ぐ、朽木さん…。」

「朽木…。」

「朽木さん。」

「朽木さん。」

「ルキ姉。」

「ルキアちゃん。」

「…。」

「朽木さん…。」

「ル、ルキアちゃん！？。」

上から、井上、チャド、石田、たつき、夏梨、遊子、一心、水色、  
路智だ。

「…。」

ルキアは黙つて、一護のほうを向いた。

「ン。なんだルキア？。」

ドシ ドシ ドシ ドシ

ルキアがすごい足音を立てながら一護のほうへ近づいた。  
「何が…。久しぶり…だ。」

۱۰۰۰

一護は驚いて変な声を上げた。

シ！

「つ！：。何すんだよ、ルキア！！痛いじやないか！。」  
「当たり前だ！痛いようこ殺つたんだからな！。」

ルキアはまた一護を殴った。

みんな目の前の光景に啞然とした

「ちょっと朽木さん！やめなつて！」

再び、ルギアが、一護のことを殴った時の音で我に帰った井上が、急いで止めた。

「ど、止めるな！井上！！あと一発。あと一発、殴らなければ私の  
気が收まらない！！。」

「なんで朽木さん、出てきてそうそう、黒崎君を殴つてんの？」  
「……あの、一護に私の存在がばれたからだ。」

味だそれ！。  
」

「なんだと！俺より弱いくせに。」

「貴様こそなんだ。さつきから偉そうに！お前はそんなに偉いのか？もう死神代行ではなかろうに！……！」

「たまれ！お前」」を、  
「そんなに偉くなつたのか？」

「どうだー。」  
ルキアはそう言いながら自分の左腕についている、副官掌を見せた。

「昇進したのか…。」

石田がつぶやいた。

「ああ。さすがに50年もたつとな。」

「お前その割には、ちつとも成長してねえじゃないか！外見が。」  
一護が今思ったことを口にした。

「五月蠅い！たわけが！。」

ルキアは、顔を真っ赤にして答えた。

「はいはい。」

慣れたようなやり取りに、一護以外のみんなは、いまだに固まっていた。途中でつぶやいた石田、井上も、再び硬直状態に、戻っていた。

「ルキ姉！！」

一番最初に、硬直を解いたのは、夏梨だ。

「…。なんだ。夏梨か。」

一護が少し驚きつつ、つぶやいた。

（まさか一番最初に、ルキアに声をかけるのが夏梨だとは思わなかつた。）

「なんだ。夏梨。」

ルキアが夏梨に問いかけた。

「うん。なんでルキ姉は、ここにいるの？」

（確かにそうだ。なんでルキアがここにいるんだ？）  
一護は今の夏梨の問いかけを聞き、思った。

「…。私は、一護たちを迎えてきた。」

「……。へつ？。」

一護がすつとんきょううな声を上げた。

「…えつ。なになに。なんでルキアちゃんが一護たちを迎えてきたの？」

今の一護の声を聞き、我に返ったのか、啓吾がルキアに聞いた。  
「つむ。私は、一護、遊子が死に、尸魂界へ来たとき、一護を死神に引き入れようとした…というの知ってるな。」  
ルキアは、皆の顔を見渡しながら言つた。

当然みんなは、うなずいた。

「それでその時、一護は断つた。」

「うん。」

遊子がうなずいた。

「その時の一護の言い分が、『俺たちが死んだのは、皆より早い。だからここに』。知り合いがいねえ。まあここにいるやつら、全員そうだけどな…。けど俺は、しばらくは遊子といたい。しかも俺は死神になる気はねえ。遊子を一人にしたくなねえからな…。また、俺に死神になるようにお前たち死神が、言いに来るなら、おれの知り合いが全員死んだとき、もう一度来てくれ…。その時までに、答えは用意しとく。』

…だ。だから約束どおりに、私は迎えに来たのだ！」

「そうだつたんだ…。」

井上がつぶやいた。

「…黒崎。お前、そんなこと言つてたのか。」

石田が一護に聞いた。

(…。俺、そんなこと言つたか?)

一護は心の中で自分に問い合わせていた。

一護は真剣に、今ルキアに聞かれたことを、考えていた。

「…い…。お…。黒崎! おい。黒崎!。」

考へにふつけていたのか。一護は石田の声を聞き取るのに時間がか

かつた。

「ン。なんだ、石田。人の耳元で。」

「君が僕の質問を無視したからだ。」

「んだよ。そんぐらいで。てか、お前いつ俺に質問した?。」

「さつきださつきーもう一度言つてやろうか?。」

「ああ。頼む。」

「…。お前、そんなこと言つたのか?。」

「そんなこと?。」

「さつき朽木さんが言つてたことだ。」

(さつき?ああ。あのことか。)

「うん。言つたぜ。」

「そうか。」

「それで。」

「それでつて?。」

たつき、に声をかけられ、ふりかえりながら一護は答えた。

「だから、あんたが死神になることについて。」

「ああ。それか。なるぜ死神に。お前らもなるんだろう?。」

「なれるなら、なりたいけど。でも一護は、もともと死神代行だから、学校に行かなくていいんじゃないの?。」

たつきが聞いた。

「ン? そうかもな。どうなんだルキア。」

「ん。確かにお前なら、学校に行かなくてはいいかもしけないが、お前、鬼道ができるだろ?。」

「ああ。」

「だから、多分だが、その点に関しては、学校に行けと言われると思つが…。」

「だ、そうだ。たつき。」

「ふーん。で?。」

「で？って何が？」

「結局あんたは、死神の学校に行くの？行かないの？」

「うーんそうだな。俺的には行きたいけど。行つてもいいのか、ルキア？」

「ああ。総隊長は『本人の意思を尊重する』とおっしゃっていたからな。」

「じゃあ。俺、行くわ学校。」

「ちょっと。一兄そんなに簡単に決めていいのかよ？」

夏梨が、「待つた」と言いながら、聞いてきた。

「ああ。だつて俺の好きなようにしていいんだる。だつたら俺は学校に行くよ。といふか行つてみたいんだよ。死神の学校に。」

「そつ、そつかあ。じゃあいいよ。」

「……。話は、まとまつたか？」

話の区切りがついたのを、見てルキアが聞いた。

「ああ。」

一護が答えた。

「じゃあいくぞ。」

「……。行くつてどこに？」

石田が、聞いた。

「決まつてあるだろ。」

「…………はあ？」

全員が聞いた。

「瀧靈廷だ。」

## 瀬靈廷へ（後書き）

どうですか？ついに一護たちは、瀬靈廷へ出発します。

ちなみに、なぜ一護がルキアの存在に気づいたかは、次回でわかります。

一心の出番少ないですね。多分、次回でじばらくは出番がありません。

誤文字の、挿描等の報告、感想、などなどお待ちしています。

**滝靈廷へ、出発だ（前書き）**

ルキアたちは、ついに滝靈廷へ出発です。

4話目スタート！

## 滝靈廷、出発だ

旅立つときは 仲間とともに

新たな場所に 足を踏み入れる

\*

\*

\*

\*

「…………滝靈廷？！」

これからどこに行くのかを、ルキアに聞き、帰つてきた答えが、皆を驚かせた。

「うるせーーそんなに驚かなくていいものを。」

「おこおこ。ルキア。なんでいきなり滝靈廷なんだよ？」「ほかに行ける場所があるとでもいうのか？」

ルキアは一護の問いに、逆に聞いた。

「そりや。お前。俺たちが、行けるところの一つや、二つや……。」「いや。なにぞ黒崎。そんなところが。」

石田が、きつぱりと言つた。

「そんなきつぱり言つなよ……。」

「ほーらな、一護。」

「……。」

「あつそつだ。黒崎元隊長。」

「ん。なんだ？。」

今まで出番が少なすぎ、隅っこで落ち込んでた、一心が、顔を擧げた。

「　　え　　！　　」

遊子、夏梨、一護、の3人は、驚いてものすごい、声を上げた。

「お、親父。隊長だったのか？」

「おう。あれ言つてなかつたか？」

「ああ。」

「わうか。俺は、7番隊元隊長だ。」

「　　ええ　　」

「　　。」

「　　。」

「貴様、ついでござれ！」

「　　はい。」

（なんかこんなやつ取つたもあつたような……。）

石田は心の中で思つた。

「黒崎元隊長。」

「なんだ。」

「ちよつと……。」

と、言いながらルキアは、手で招くよつなじぐわをした。

「ん？」

「耳を。」

「……。」

「……。それはほんとか？ルキアちゃん。」

「はい。……。あとそのルキアちゃんところのは止めてしまつてるので

すが……。」

「えつ。なんで？。」

「そんなの決まつてるだろ。」

今のルキアの声を聴き、夏梨が話に割り込んできた。

「お前にやう呼ばれるのが、キモイからだよひげ。」

（おいおい。夏梨。お前、親父に対する態度は変わらないんだな…。）

一護は、思った。

「ううそ ん！」

「とてもいいづらいのですが…。その通りです。」

「ガビ ン。ひどいよー。ルキ「いいから。黒崎元隊長、早く行つてください！」

「はーい。」

一心は、瞬歩でその場から消えた。

「おい。ルキア。親父はどこに行つたんだ？」

「一護は、まだ知らなくていい。」

「はあ？ それ、どういう「ああ、早く、瀬靈廷に行くぞ。」

「おい。ルキア。無視すんな！」

「だまれ！ 行くぞ！」

「行くのはいいけど。朽木さん。どうやつて行くのさ。」

石田が、さつきから疑問だつたことをルキアにぶつけた。

「それは、これだ！」

ルキアはそう言いながら、馬を指さした。

「「「「「「馬あ？」」「」「」「」「」

「ああ。」

「てつ、まさかと思うけど、馬に乗つてトコトコ瀬靈廷に行く。」

とかいうんじゃないよね、ルキ姉？」

夏梨が、疑いの目でルキアを見た。

「そんなわけなかろう。この馬は少し特殊でな。技術開発局に、頼んで特別に作つてもらつたんだ。」

ルキアが自慢そうに言つた。

「そこお前が自慢するといじやねえだろ。」

一護が、突つ込んだ。

「五月蠅い！黙つて聞け！。」

「はーい。」

「で何が特殊なの。その馬。」

夏梨が、脱線した話を元に戻した。

「よく聞いた。この馬は、靈力があるやつでしか乗れないんだ。しかも、もともと死神だった者は、死神の姿に戻れる。」

「えつ。それって。つまり……。」

井上がつぶやいた。

「その馬に乗れば、黒崎は。……。」

石田が井上の跡を継いだ。

「…………死神に戻れる？！」「…………

「それほんとか！ルキア！！！」

一護がうれしそうな声を上げた。

「ああ。それでは、説明終わりだ。さあみんな、馬へ乗れ！。」

「ああ。」

みんな自分の前に来た、馬に、またがつた。

「どうだ。一護、死神に戻ったか？。」

ルキアが一護に問いかけた。

「……。まだみた」

いだ。一護は最後まで言えなかつた。体が急に光だしたからだ。

「おい！ルキア、どうなつてんだ！？。」

一護が素つ頓狂な声を出した。

「私にもわからん。なんせ、この馬は、だれにも試したことがないからな。」

「はあ？！俺は実験体かよ！」

「まあそんな感じだ。

「おい！」

一護が突っ込みを入れた。

わあ！！」

一護が急に大声を上げた。

急いで一護のことを見た ルギア 石田 井上 チャト たーき  
啓吾、水色、遊子、夏梨は、言葉を失った。

一護が乗つてゐる馬、そして一護自身が、思わず目をつ

そして、すごい衝撃波とともに、一護の死神としての靈圧が、ルキアたちを襲つた。

「 あ 一 二 三 」

みんなは一瞬、  
気を失つた。

\*

「つ。技術開発局の奴ら目…。もつとましには作れぬのか…。」

最初に、  
口を開いたのは、  
ルキアだ。

はんとたよ

右曰たリ土方は同意した

「悪かつたな。靈圧操作が下手で!!。」

「い、  
一兄、  
」。

「ぐ、黒崎…。」

「黒崎君。」

「一護…。」

「…一護。」

「一護。」

「い、一護。」

「お兄ちゃん…。」

上から、夏梨、石田、井上、チャド、路見、水色、たつき、遊子の順だ。

「い、一護！ その姿…。」

一護は、死神代行時、また死神がいつも着ている、死霸装を着ていて、背中には、一護の斬魄刀。斬月が、あつた。

「ん。ああ。なんか、俺、死神に戻ったみたいだな…。」

「…。『戻ったみたいだな。』じゃ、ないわ戯け！…。」

「んだよ、ルキア。なーにが、『戯け！…』だ。もともと、この馬は、俺が死神に戻るための馬だろ？。」

「まあな。」

少し違うが…。ルキアは思った。

「じゃあ俺が、死神にもつどつたから良いんじゃねえか。」

「そうだな。」

「ねえ。朽木さん。本当に、瀧靈廷に行くの？」

「ああ。」

「じゃあ早く行こうよ。」

「なんでだ？。」

「あついや。あ、のね。なんか私たちが乗っている、馬。機嫌、悪くなつたみたいで…。」

「はあ？。」

ルキアは、驚いた。そして井上に促されるままに、井上たちが乗つている、馬を見た。

「ブルルウ。」

ほんとだ。技術開発局に奴ら曰。妙なところに、こだわりよつて。ルキアは、こぶしを握りながら、思った。

「まあいい。皆、それでは、これより瀬靈廷に出発だ！！」

## 瀧靈廷、出発だ（後書き）

瀧靈廷になかなか出発しません！次話には、出発できるかな？

ついに、一心がいなくなりました。（笑）  
なんで、一心がいなくなつたのかは、秘密です。

今回の話、なんか短いです。すいません。

誤文字の指摘、感想等、お待ちしています。

## 瀧靈廷への道のつ（繪畫版）

やつと、ルキアたちは、瀧靈廷へ出発です。

5話四スター。-

仲間とともに 歩みを進め

仲間とともに 強くなれ

\*

\*

\*

\*

「おいルキア。俺どうすれば、いいんだ？」

「なにがだ。」

「いやあ。やつさ、俺が死神になつたとき、なぜかわからないが、馬が消えたんだ。」

「で？」

「いや。だから、俺はどうすれば、いいのかつて聞いてるんだけど……。」

「そんなもの。瞬歩で来ればよかる。」

「いや。そうしたら。馬に乗つてる、ここにいらはどつするんだ？ 瞬歩の速さで、ついてこれるのか？」

「当たり前だ。この馬をなんだと、呪つてるんだ？」

「……俺を死神にするための馬。」

「馬鹿者！ そんなわけないだろ。この馬は、少しであるが、死神の力使えるのだ。ただし、この馬に乗つてる者の、靈圧により、多少の差は出るがな。」

「へえ。そうなの。じゃ、俺は瞬歩で行くわ。」

「ああ。そうしてくれ。す

ルキアは、空気を吸つた。

「それでは、皆、瀧靈廷へ行くぞ……。」

「…………おお

「 」「 」「 」

\*

\*

\*

\*

ところ変わつて、瀧靈廷内。十二番隊隊舎

「来るかなあー？」護君は。

「来るでしょ。あの一護君なら。」

ルキアが、いなくなつてすぐ倒れた、浮竹は八番隊隊長と話をしていた。

「てゆうかさあ。浮竹、もう起き上がつて大丈夫なの？」

「ん。ああ、大丈夫、大丈夫。さつきは、目眩がただけだからね。

「いや、その目眩、普通の人に、とつてはものすんごいだつて……。」

「いやあ。浮竹が、倒れると僕は、清音ちゃんと小椿君に怒られるからねえ。」

京楽は、思った。

「京楽は、心配性だなあ。」

「いやあ。浮竹が、倒れると僕は、清音ちゃんと小椿君に怒られるからねえ。」

「あははは。そうだな。」

ドタ ドタ ドタ ドタ ドタ

ガラ

急に障子が開いた。

「報告します。朽木ルキア副隊長が、元死神代行、黒崎一護を死神に戻すことに成功。また、本人は死神の学校、真央靈術院しんおうれいじゅついんに、行き

たいと、言つてる模様です。」

小椿が、ルキアからの報告を浮竹に話した。

「ちょっと……それ私が言おうと思つてたのよ……勝手に言わないでくれる?。」

清音が、障子の向こうから、顔を出した。

「そんなの、しらねーよ! 大体、地獄蝶が、俺のところに飛んできただから、俺が報告するのが、普通だろ!!。」

「あなたの、ところに飛んできたんじやなくて、たまたま、あんたがいたところに飛んできたんでしょ!! 勝手に、自分のところに飛んできたなんて思わないで!!。」

「な、何お……!。」

「何よ……私が何か間違えてるとしても言いたいの?。」

「ああ! そうだよ!。」

「じゃあ、言つてみなさいよ!。」

「はあ。また始まつたよ。」

「始まつちやつたね~。」

浮竹、京楽はあきれ顔で言つた。

「は~い! ストッパー。」

京楽は、大声をだし、二人を制した。

「……。」

「それで?。」

「それで? といわれますと。」

小椿が、不思議そうに言つた。

「朽木は今、どこにいるの?。」

「はい。それでしたら、今は瀧靈廷に向かってるやつです。」

小椿の横から、清音が口を挟んだ。

「そうか。」

浮竹、ほつとしたような声を上げた。

\*

\*

\*

\*

「よしみんな。馬に瞬歩、させらるや。」

「てつ。黒崎！馬にどうやって瞬歩させらるんだ！。」

「さあどうやるんだうつな。」

「おい。」

石田が突っ込んだ。

「おい。ルキア！石田達が、どうやって馬に瞬歩させるか聞いてんぞ！」

一護は、家の屋根に乗ってる、ルキアに呼びかけた。

「分かつた。ちょっと待つてろ。今報告中だ。」

「へーい。」

「まつたく、一護は。報告します。」

ルキアは地獄蝶に向かつて、報告した。

「元死神代行、黒崎一護を死神の姿に戻すことに、成功。また本人は、真央靈術院に行きたいとのことです。報告、終わります。」

\*

\*

\*

\*

「馬に、瞬歩させるのは、実はすごく簡単なことだ。馬に乗つて『瞬歩したい』と思つ、といつか、念じるだけだ。」

「ホントー？」

夏梨が、訝しげに聞いた。

ルキアは、無言で頷いた。



「念じるだけだよー遊子ー。」

「」

シユン

「わー いできた！」

一  
せ  
た  
ね  
遊  
子  
！

パチン！  
ふたりは、ハイタッチした。

遊子が瞬歩した。

「おい、密室！早く来いよ、置いていくぞ！」  
「えー、ちょっと待ってよ。」

シユン

「え？ どうせやつた。」

「お、い、お、い、くぞ、！」

「え！ ちよつと、待つてよー一護！ 一護たちほか、皆を置いて、600mくらい進む

「早く来いよ…。てつ、夜一さん！なに、何気に俺の方に乗つてる

「良いではないか。良いではないか。」

「はい。もういいです。」

\*

\*

\*

\*

「で、ルキア。いつ瀞靈廷につくんだ？」

「もう少しだ。」

「さつきからずっとその答えだぞ！」

「黙つてついてここ。もつすぐだからな。」

「わあ。」

「どうした井上？」

井上が、急に大声を出した。

「なんか私の馬と、私自身を守るよつて、オレンジ色の膜が出てきたんだけど……。」

「ほんとだなあ。」

一護はそう言いながら、チヨンと、さわつみた。

ジン

この感覚前にもあつたよつた。

一護は井上を守つてゐる物をさわりながら思つた。

何だつけなあ。なんか、井上の、能力だつけなあ。……。

一護はこれが何かを思い出した。

「おい、井上。」

「何？」

「お前のまわりあるオレンジのもの。それ、……。」

「盾舜六花じやないか？」

「ほえ？」

「ほえ？じやなくて。そのオレンジのものは、お前の能力の、盾舜

六花の、三天結盾じゃないかっていつてんだ。

「たしかに。そういうわれるとそつかも。」

井上は、オレンジのものと睨めっこしながら言った。

「だろ。」

「…。ああそういうえば、言い忘れていたが、」

ルキアが急に口を挟んできた。

「この馬は、乗ってる者の靈圧によつてころころ変化する「じし」。

つまり、斬魄刀の能力と同じ。」

「…。ということは、私の斬魄刀の能力は、盾舞六花つてこと?。」  
「そもそも言い切れない。この馬の変化は、乗ってる者の靈圧によつて変わるも…。井上は現世で才能を開花させてるから、単純にその時の名残で、馬の変化が、三天結盾だったといふこともある。」

「そうなんだあ。」

「なんか僕と、茶渡君も変化してきた。」

「ム。」

「石田の変化ってどんなんだ?。」

一護が石田のほうへ瞬歩した。

「そんなに変化はしてない。じいて言えば、こいつの腹に、クインシークロスが出てきたことか。」

と言いながら、石田は馬の腹を指差した。

「ふーん。チャドは?。」

「ん。」

と言いながらチャドは、馬の腕を指差した。

「おつ。チャドの馬の腕、お前の戦つときの腕になつてるじやん。」

一護は、

まあ、予想はしてたけどな。

とつぶやきながら、瞬歩した。

「うそつけえ。絶対おぬしは予想して、無かつたろ？。」

「五月蠅いすつよー。夜一せん。あと予想はしてました！ー。」

「ほんとかのー？。」

一護はもう、無視した。

「あつあの、」

「ン？ どうした。遊子。」

「アッ！ お兄ちゃん。あのね私の馬もね、変化したの！」

「どう、変化したんだ？。」

「あのね！ 馬が、全体的に濡れてきたの。これって変化の一部？。」

「どうなんだ？ ルキア。」

「ああ。多分遊子は、流水系だな。」

「だつてよ、遊子。良かつたな！。」

「うん！。」

「ほほー。遊子は流水系か。」

「なんすか夜一さん。いちいち出てきて。」

「なんじや。出できりやダメなのか？。」

「。。」

一護はまた無視した。

「ねえ、一兄。あたしも変化したよー。」

「おつ。夏梨はどう、変化したんだ？。」

「あたしは、なんか」いつらがこう、電気が流れてるみたいに、ビ

リッと。」

「ん。夏梨は、鬼道系だな。」

「ふーん。」

感心なしか。夏梨は。。。。

一護は思った。

「流水系に鬼道系。しかも電氣ときたか。なかなかいい、組み合わ  
せじやな。」

「また夜一が出てきた。一護は、最初から無視した。

「なんじや。つかかってこんのかさみしいの。」

一護はまた無視した。

「なあいーちー」

「五月蠅いつすよー夜一さん……黙つててください……。」

「はい。」

## 滝靈廷への道のり（後書き）

なんか中途半端なところで終わりましたね。（汗）

今回は、なんとなくみんなの斬魄刀の能力を少し公開です！

残りの、たつき、路路、水色は次回で。

そういえば、なぜ一護はルキアが来たのか分かったのか、…。書いてなかつた…。

次回、絶対書きます！

誤文字の指摘、感想等などなど、お待ちしています。

## 滌靈廷に到着！（前書き）

ついに瀬靈廷です。

## 6話スタート！！

新たな力 新たな能力

\*

\*

\*

\*

「いいなあ。」

たつきがつぶやいた。

「なんで私はでないのかなあ。変化。」

そう言いながら自分が乗つてゐる、馬を見た。

「わあ！」

それを見た瞬間、たつきは大声を上げた。

「どうした。たつき。」

一護が瞬歩で飛んできた。

「つじにきたよ。」

たつきは自分の馬を見るような形で止まつてた。

「な、何がきたんだ？」

一護は、なんか変だなと思いつつ、たつきに聞き返した。

「変化！」

「ほんとか。良かつたな。」

「えつ。たつき姉もきたの。変化。」

「ほんとたつきちゃん! どんな変化なの?」

「よくぞ聞いた。織姫! 私の馬の此処、よ く見てござりん。」

「「「」」」

一護、夏梨、織姫はたつきが指差した馬のおなかあたりを見た。

なんか色が変わってるなあ。最初は黒だた氣がする。あつ、また変わった。

一護は見ながら思つた。

「お い。ルキア。馬の色が変わるのは何系だ。」

「色が変わるかあ。それは、鬼道系か? 夜一殿はどう思いますか?」

「うむ。」

「おい、ルキア。なんで夜一さんに聞いてんだよ。」

シユン

ルキアが瞬歩して、一護の隣に來た。

「貴様には、関係ないだろ。黙つて聞いていとけ。」

「…。」

一護は無視した。

「おーい。言つてもよいか?。」

夜一が、一護の肩の上で伸びていた。

「はい。」

「色が変わるのは、鬼道系じゃううな。」

夜一は、すばり、という感じに言つた。

「そうですか。やはり鬼道系。」

「そうなのか。」

「

一護が会話に割り込んだ。

「なんだ一護。聞いておったのか。」

「聞きたくなくても聞いちゃうんですよ。夜一さん。」

「ああそーかいそーかい。」

夜一は受け流した。

一護は軽く無視した。

「で。たつきは、鬼道系つてことで間違いないんだな。」

「ああ。」

夜一の代わりに、ルキアが答えた。

「そうか。」

一護はそう言い、瞬歩でたつきのもとへ行つた。

「おーい。たつき。」

「何、一護。」

「お前の能力分かったぞ。完璧に信用していいのかはわからないけどな。」

「でー。」

たつきの顔は期待で輝いてる。

「お前は、やっぱし鬼道だとよ。」

「やっぱり。」

「やっぱり、てことは、予想してたんだな。」

「うんまあね。」

「そうか。」

一護はそう言つてから、瞬歩でルキアのところに移動した。

「ところで一護。」

瞬歩した瞬間に、ルキアが話しかけた。

「何故、あの時私の存在に気付いたのだ?」

ルキアが、悔しそうな眼をしていた。

「あの時つて?。」

「あの時つて?。」

一護はルキアが、言つてることが理解できなかつた。

「あの時だ、あ・の・と・き！私が、お前が住んでる家の後ろに隠れてた時だ！。なぜ、お前は私の存在に気付いたのかを聞いておるのだ！」

「。ああ。あれか  
一護は、理解した。

「そのことか。見えたんだよ、お前の姿が。」

「！。ほんとか。」

「ああ。」

「そうか、」

ルキアは、そつけなく答えた。  
一護の答えが意外だつたようだ。

「いーちーー。俺反応出ないよー。」

「反応じやなくて、変化でしょ啓吾。」

ルキアとの話が終わつた瞬間、啓吾と水色が話しかけてきた。

「僕は一応出たよ。変化。」

「オー！なんで、俺はいつも最後なのーー。」

啓吾が嘆いてるのをよそに、一護は水色に聞いた。

「で、どんな変化だ？」

「なんか馬が、急に暖かくなつてきたんだ。」

「それは、炎熱系だな。」

「ルキア！急に割り込んでくるなよ。」

「貴様はいつもやつておるだろう。」

そう言いルキアはキつと一護を睨んだ。

「はいはい。」

「ふーん僕は炎熱系か。ほかにも統系つてあるの？」

水色がルキアに聞いた。

ルキアは、頷きながら言った。

「ああ。お前が持つてゐる炎熱系のほかに、氷雪系、遊子が持つてゐる、流水系。夏梨、たつきが持つてゐる鬼道系。そして、一護が持つてゐる、斬月は直接攻撃系だ。ちなみに私の「袖白雪」は、氷雪系だ。

「ふーん。」

水色は、あつさり返事をした。

「おーい。いーちー！。」

突然後ろで声がした。振り返つたら啓吾がいた。

「なんだよ。啓吾。」

「俺変化でないんですけど！」

「へー。もしかしてお前、死神の才能ないかもな。」

「ガビーン！」

「そう、気を落とすな。啓吾。」

ルキアが声をかけた。

「ルキアちゃん！」

「馬に変化が出ないのは、一護と同じ、直接攻撃系か馬に変化がない、鬼道系か本当に才能がないのかのどちらかだ。」

「えつなにそれ。」

「ほら着いたぞ！。」

ルキアは啓吾を無視しながら、言った。

「ついたつてどこに？。」

一護はルキアに聞いた。

みんなが瞬歩して、一護の隣に並んだ。

「わあ。」

「久しぶりだな。」

「ム。」

「誰かいるかな?。」

「…ここが。」

「ワーオ。」

「ヘーエ。」

上から、一番最初に一護の隣についた、夏梨。そして、石田、チャド、井上、たつき、啓吾、水色の順だ。

「何言つてるのだ一護。」

「何つて…。」

「下を見てみる。」

「えつ。あ…。」

一護は言葉を失つた。

「…」

「瀧靈廷だ。」

ついに、瀬靈廷につきました！

この話で、なぜ、一護はルキアの存在に気付いたのか、お分かりいたしましたか？

分かつていただければ幸いです。

あと、余談なんですがルキアが現れて、どうに行くのか一護が聞いたてルキアが答えたセリフと、上の最後のセリフが同じということに気付きました。

まあいいです。

「A new adventure and bonds」の、番外編始めました！

「A new adventure and bonds」<sup>（番外）</sup> という題名です。

良かつたら、読んでみてください。

また、この番外編は皆様からのリクエスト話や、私が思いついたコメディ話、本編では触れられないルキアの昇進の話などを書いていく予定です。

何か、リクエストがありましたら、下の「一言」というところに書いてください。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいという、リクエストなどなど、お待ちしています。

一 番隊隊舎（前書き）

特にあります。

7話目ついでに！

心は

誰かを大切に想うため

誰かを愛しく想うため

誰かを尊く想うため

誰かを護りたいと想うために

「やつと着いたか。」

夜一さんが、一番最初に口を開いた。

「なんすか。夜一さん。まるで何年かぶりに来たみたいな言い方して。」

「ほんとに何年かぶりに来たんじや。」

「時々来てたんじやないんすか。瀬靈廷に。」

「来てないの。かれこれ3~40年ぐらい。」

「そりなのか、ルキア。」

「ああ。」

ルキアは頷きながら言った。

「そりなのか。」

「それよりさあ。黒崎君。」

井上が田を輝かせて、聞いてきた。

「なんだよ井上。」

「…………早ぐ、瀧靈廷に行ひよーお兄ちやん、一兄。」

「ム。」

チヤド以外のみんなが、俺に向かつて叫んだ。

「分かった、分かったから、もつすぐ行くから。お前ら少しは落ち着けつて。」

とか何とか言つてゐる本人が一番行きたそりなんだけな……。

石田は一護を見て思つた。

「おー、ルキア。早く瀧靈廷に行け。」

「ああ。みんなついてこ。」

「どうだ？。」

俺は聞いた。

「？丹坊のところだ。」

「？丹坊か。元氣してるかな、あいつ。」

俺は、そう言つて瞬歩で消えた。

みんな俺にならって、瞬歩で消えた。

\*

\*

\*

\*

「よつ久しづりだな。？丹坊。」

俺は、？丹坊に会いそのままの勢いで話していた。

「あ。久しぶりだな。？」

護

「あ。ひつとやく通してくんないか？」

「一護の頼みならいこ。」

「うつむいて、？」丹坊は自分の後ろにある大きな扉を開けた。

「「「「「わーお。」」」」」

夏梨、遊子。そして、啓吾、水色、たつきが感嘆の声を上げた。

「よーく、見ろよ。」」」が滌靈廷だ。」

一護は、感嘆の声を上げた五人に向かい、言った。

「なんで、一護が言つておるのだ。そこは、私が夜一殿のセリフではないか！」

「そんな固い」と氣にするなって。ほり、もうみんな行っちゃったぞ。」

「おー。お前ら、勝手に行くな。」

ルキアが、先の5人を追いかけて行つた。

「ほれ。一護もはよ行かんか。置いてきぼりを食らうが。」

「はーはー。井上たちは？。」

「前じや。」

ほんとに置いてきぼりを食らうとは……。

俺は思った。

\*

\*

\*

\*

「よつと。」

俺は、やっとルキアたちに追いついた。

「ちょい待てよ。ルキア。」

「なんだ。あとからくるお前が悪いのやあひー！」

「こいつ、副隊長になつてから切れやすくなつたか？」

怒つてこむ、ルキアを見て俺は思つた。

「こひらとて、あいつらを追いかけるのに大変なのだ。夏梨はいつの間にかいなくなるし。遊子は、夏

梨についていくし。啓吾はギヤーギヤーわめくし。まともなのは、水色とたつきだけか！」

「いや、そんなこと、俺に言われても。」

「お前の妹たちが迷子になつてるんだぞ！」

「遊子たちは迷子になつたのか？つか、もし迷子になつたとしてその馬には探知機能とかついてないの

か？」

「う…。それは、ついてたよくな気がする。」

「ついてんじやねえか。早くそれで探せよ。」

「誰を探すって、一兄。」

後ろで声がした。

俺は振り返った。

「なんだ夏梨いたのか。遊子は？」

「ん。」

夏梨は後ろを指差した。

「なんだよルキア。遊子も夏梨もいるじやねえかよ。」

「ん。…。まあいい。これで全員そろったか？」

「ああ。た、ぶんな。」

俺はみんなを見渡しながら言った。

「それじゃ。護挺十三隊の一一番隊隊舎に行くぞ。」

ルキアが言った。

「ねえ、一兄それって何？。」

夏梨が聞いてきた。

「ん。 そうだなあ。 死神の総本山といったところか。」

「ふーん。」

「じゃあ行くぞ。」

ルキアが言った。

シウン

ルキアは瞬歩でその場から消え、先ほどから見えていた大きな建物のところに立っていた。

あいつ、瞬歩できる距離が伸びたな。

俺は、ルキアを見ながら思つた。

そしてみんな、その建物に瞬歩した。

\*

\*

\*

「うーん、どこ?。」

たつきが聞いた。

「だから、これが一番隊舎。」

俺は答えた。

「それで私たち、ここの中に入るの？」

「ああ。まあそんなところだ。」

「そんなところだ。じゃないだろうが。私たちはこれからここに入つて、総隊長殿に会い死神の学校に

通うのだろう。」

「えつ。ルキアも通うのか？」

「馬鹿が。私は通わない。副隊長の仕事があるからな。時々顔を見せに行くぞ。」

「はいはい。」

「ねえ。一兄。あたしたちなんか見られてる気がするんだけど……。」

「私も。」

「私も。」

「俺も。」

「僕も。」

上から、遊子、たつき、啓吾、水色の順。

「まあそりゃうつな。俺たちここでは有名人だから。」

「えつそりゃうつな?ー。」

夏梨が驚いた声を上げた。

「まあな。あれ、言つてなかつたか?。」

「うん。」

「じゃあ。「ストップ。そこまでだ一護。言つとくがお前らの」と  
は死神の学校、真央靈術院しんおうれいじゅいんに十分といつ程授業に出る。あいつらに  
教えるのはそれからでも遅くなかつ。」

「そりだな。じゃ、夏梨それまで我慢しつけ。」

「一兄たちどんなことしたの。あーもつ。早く知りたい!」

「あはは。まあいい。早く、総隊長に会いに行こいゼルキア。」

「そりだな。」

ルキアは、そりだなー一番隊舎の扉を開けた。

## 一 番隊隊舎（後書き）

フ 。 やつと、やつと瀧靈廷の一 番隊舎にておもつたね。

なんか、長くありませんでした？

今回ば、一 護視点で書いてみました。

良くかけてましたか？

番外編のほうも、宜しくお願ひします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしことに「リクエスト」などなどお待ちしています。

— 番隊にて（前書き）

総隊長登場です。

では、第8話どういへん—

私は 世界のすべてを愛し

彼は 世界のすべてを恨む

「おい、ルキア。まだか。」

「まだだ。」

「長くねえか。」

「ああ。長いな。」

「もう20分ぐらい歩いてるだい。」

「あと10分くらい、歩くだ。」

「えー。」

私の後ろで、誰かが叫んだ。

まあしょうがないだろつ。最初に会った時から休みなしで動いているからな。

一護たちは大丈夫だらう。が、皆吾や遊子たちにはきつこだらうな。

実際、あいつらだけ馬に乗つてゐるのに少しペースが遅い。

私は思つた。

「おい。まだか。」

また一護か。

お前は疲れてないだろ？

私は振り返つた。

そしたら驚いた。一護は、遊子を背負つてゐた。

どうやら疲労で倒れたらしい。

そういえば、あの五人の中で遊子が一番靈圧が低かつた。

なるほど。

私は理解した。

わざわざから、一護がしつこく「まだか。」と聞いてくる訳を。

遊子を休ましてあげたいのだ。

あの馬は、乗つてゐるだけで靈力を消耗する。

一護はそれを悟って、遊子を馬から降らしたのだろうか？

そんなことを考えてると、目的の部屋についた。

「一護、ついたぞ。」

私は、一番最初に一護に声をかけた。

早く遊子を休ませてあげたいだろう。

私なりの気遣いだ。

「お、わりいな。」

一護は、私が言いたいことを理解したようだ。

「あつがとう。」

こんなことで、お礼を言われる筋合いはない。

私はそう思った。

「総隊長。黒崎一護、またその同伴を連れてきました。」

私は、総隊長に報告した。

「うむ。馬はねこの柱につないだけ。ところで、」

私は、総隊長が仰ったように柱に馬を全部つないだ。

「はい。なんでしょうか。」

「その、黒崎一護の姿が見えないが。」

「あー。一護はたぶん、遊子を寝かしてるとか。」

「誰を寝かせてるって?。」

「一護の妹が倒れてしまつたので布団に寝かせてるかと…。」

「そうか。まあ良い。早く、黒崎一護をここへ呼ぶよつ。」

「はい。」

私は、一護が遊子を寝かしている部屋の隅に行つた。

「おい、一護。総隊長が呼んでいる。」

「ん。そうか。じゃあ、遊子の」と頼むわ。夏梨。」

「うん。」

一護は、私の呼びかけにすぐに応じた。

「じゃあ。行くか、ルキア。」

「ああ。」

\*

\*

\*

\*

「黒崎一護。久しぶりだな。」

「そうですね。」

「妹は、良いのか?。」

「あー。まあみんなが、見てくれてますから。」

「そうか。」

「はい。それで、」

「つむ。これから一週間後。おぬしらを、死神の学校「真央靈術院」の、編入入学を許可する。それま

での、時間は自由に動いていいぞ。一週間後に一番隊隊舎に集合。お主も会たい奴があるじゃろう。」

「はい。ありがとうございます。」

「失礼します。」

「つむ。」

\*

\*

\*

\*

「おい、夏梨。遊子は大丈夫か?。」

「アツ、一兄。うん。遊子は大丈夫。といふで話はへ。」

「終わった。おい、皆。」

一護は、皆に向かつて言った。

「学校への入学は、一週間後。それまでは自由行動ださうだ。ナゾ、ここに来たことのない、遊子、夏

梨。啓吾、水色、たつきは、ここに来たことのある、井上、石田、  
チャドか俺と一緒に行動するよつ

に。」

私は、驚いた。

一護の言い分が、意外と筋が通つてたからだ。

「分かつた。」

代表として、たつきが答えた。

「じゃあ、皆自由行動な。俺、行きたいとこあるんだ。」

「遊子と夏梨は俺と来い。啓吾たちが、お好きなよう。」

「じゃあ。」

シウン

一護は、遊子、夏梨と手をつないで瞬歩で消えた。

## 一 番隊にて（後書き）

短い！

自分でも驚きました。

今回は、ルキア視点で書いてみました。  
なんかルキア視点で書いてると、話が暗い気がします。  
どう思いますか？

今日は、休みなのでどんどん更新しちゃいますよー！

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいといつ、リクエスト  
などなど、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8579x/>

---

A new adventure and bonds

2011年10月29日14時19分発行